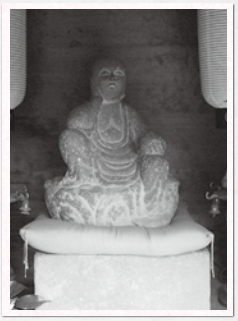
信仰される地蔵菩薩

西田 孝司（松原市文化財保護審議会）

▲首なし地蔵（別所6丁目）



▲延命地蔵尊（天美南4丁目、堀地区）

▲火除け地蔵（三宅中5丁目）

▲栄和地蔵尊（新堂3丁目）

新堂・三宅・堀・別所に祀られる栄和・火除け・延命・首なし地蔵

八月二十二、二十三、二十四日を中心に市内各地でも地蔵盆がにぎやかに行われました。地蔵はシャカが亡くなった後、人々を教化・救済した菩薩で、丸くにこやかで柔和なお顔立ちが特徴です。長寿や子どもの成長、安産などさまざまな願いを叶えてくださる仏さまとして、古くから信仰されてきました。

旅人の安全を祈る道標にも地蔵が彫られ、高見の里三丁目の敬念寺（真宗大谷派）前に見られる天和二年（一六八二）七月十日の地蔵道標（「歴史ウォーク」81）は年号の入った道標としては市域最古です。ここでは、町中に祀られる数多くの地蔵のうち、地域の人々から特別に愛称を持って親しまれている四体を紹介します。

（一）　栄和地蔵尊（新堂三丁目）

浄光寺（融通念仏宗）山門を入って、右側に地蔵堂が建てられ、地蔵菩薩立像が祀られています。右手に錫杖、左手に宝珠を持っています。材質は花崗岩で、厚肉彫りです。台座から舟形光背までは九十センチで像高は六十五センチを測ります。

この地蔵は子どものすこやかな成長を願う子安地蔵で、とくに栄和地蔵尊とよばれています。「いかなる難病にも不思議なお助けがあり、なかでも子どもの夜泣きは一夜で治る」と信じられ、厚い信仰をうけています。江戸時代半ばごろの作と思われます。

（二）　火除け地蔵（三宅中五丁目）

西方寺（融通念仏宗）観音堂前に、地蔵堂があり、火除け地蔵とよぶ立像が立っておられます。右手に錫杖、左手に宝珠を持ち、舟形光背につくりますが、上部が一部欠けています。光背上部中央に地蔵菩薩の梵字である「ㄱ」を彫っています。台座から光背までは九十センチ、像高は六十六センチを測ります。材質は砂岩で、厚肉彫りにつくります。

三宅では、江戸時代の宝永三年（一七〇六）に智光坊焼きと称する大火があったことから、防火意識が強くありました。近くの屯倉神社西南角に祀られる「宝永三年卯月望日」の巨大な三宅地蔵尊（舟形光背までの高さ一八七センチ、像高一二三センチ。花崗岩（「歴史ウォーク」87）が有名ですが、火除け地蔵は三宅地蔵尊造立前に祀られていたと思われ、江戸時代中期の三宅村の大火以後、この地蔵を信仰すれば、いかなる火災にもあわないと信じられてきました。もともと、屯倉神社境内にあった神宮寺の梅松院（真言宗）にあり、同寺が明治初年に廃寺となった時、梅松院本尊の十一面観音とともに、西方寺に移されたとも伝えています。

（三）　延命地蔵尊（天美南四丁目）

再建なった浄念庵前に地蔵堂が建ち、立膝を立てる坐像が祀られています。同地は、堀地区の融通念仏宗であった浄念寺の旧地で、地蔵も本堂前にありました。丸彫りで、右手は頬をささえ、左手に宝珠を持っています。花崗岩で、像高は三十二センチを測ります。台座中央に「延命地蔵尊」とあり、側面に「文化六年巳年六月吉日」「願主久吉」と刻んでいます。文化六年（一八〇九）、堀村に人々の長寿を願う延命地蔵尊として造立されたのでした。

（四）　首なし地蔵（別所六丁目）

別所公民館広場に両肩・首から上が欠けた花崗岩製の地蔵菩薩坐像が祀られています。光背も上部が欠損していますが、総高は八十二センチ、像高は七十六センチの地蔵を浮出し、半彫りにして連華座を施こします。右手に錫杖、左手に宝珠を持っています。江戸初期ごろの作風かと思われます。

宝永元年（一七〇四）に付け替えられた大和川が洪水をおこした際、別所に流れついたといい、そのためお顔が無くなったということです。そこから、地蔵が身代りとなって首から上の病気を治して下さるという信仰も生まれてきました。もともとは、頓随寺（真宗大谷派）西側で祀られていました。